

ラットランドと新島襄と同志社

オーテス・ケリー

Otis CARRY

「インスティテューション」という概念の、日本語でのあらわし方に非常な苦勞を感じる。機関または制度というものは、思想と異なり、芽を出して満開にいたるといふことはめつたにないものである。むしろ機関はその性質上、多くの人々が一定の期間にわたりさまざまな努力をつみ重ねたことの成果である。機関は成長するにつれて榮養分とリーダーシップを必要とする。

機関を一本の成長しつつある樹と見なす場合、その核というべきものは創立当時の理念である。機関という卵を産み、次いでそれをふ化する理念は、むしろ人間の頭の中に存在する。理念が生き及び、機関のかたちをとるためには、それが表現され、しかも刺激や反応によって利益を得たり、叩かれたりする必要がある。

教育機関はそれが高等教育機関であらうと、初等教育機関であらうと、その歴史を辿ってみることは特に容易であるし、また人類の経験や現在の状況にとつて、教育機関はほとんど普遍的なものだといえる。教育機関の自然な成長過程では一つから他へと導くことが

しばしばある。その上なお、一つの教育機関が設立された当初の理念が外來のものであり、その理念が実現していく文化とは相容れないものである場合、その結果や最終の成果は、予言できないような、それでいて迎らざるに出来ないほど興味深い、劇的な要素や、運命の迂余曲折を含みうるのである。

昨年創立百周年を迎えた同志社は、まさにそのようなケースである。たしかに同志社の理念は、新島襄（一八四三—一八九〇）によって与えられた独得の呼名が示すように、大いに彼の頭の産物であった。彼は「約三千三百万人を助けるための教師や説教者を起すべく、「クリスチャンの」養成所」を設立したいと考えていたからである。山本覚馬（一八二八—一八九三）の好意と、安い値段による土地の提供とがなければ、またジェローム・ディーン・デイヴィス（一八三九—一九一〇）の熱誠のこもった参画がなければ、同志社が別の運命を辿ったろうことも、ひとしく真実なのである。

一八七五年十一月二十九日、同志社は、デイヴィスによると、六

人の学生が一人のこらず参加した祈禱会を新島家でもち、場所をうつしてもう二人が加わり、八人で最初の授業に出発したのである。やがて約四十人となった。最初の八人のうち五人は神戸と三田から来た者であり、デイヴィスの影響と指導の下にあった。彼らはさらにもっとキリスト教の訓練を受けたいと切望している連中だった。翌年九月になると、熊本バンドの連中三十四名がこれに加わった。はつきりと特定できる日付は、上のように、一八七五年十一月二十九日である。けれども、組合教会の最初の宣教師ダニエル・クロスビー・グリーン（一八四三—一九一三）が日本に到着した一八六九年（彼に就いてすぐ他の宣教師もやってきた）以来、キリスト教の働き手を養成する何らかの機関が必要であるという考えが彼らの心の中にあつたことは想像に難くない。デイヴィスはペロイト大学とシカゴ神学校出身であつた。もちろん新島はアメリカでの教育を、アンドーヴァーのフィリップス・アカデミー、アーモスト大学、そして再びもどってアンドーヴァー神学校で受けたわけである。それぞれの機関はともに組合教会の主流をなす教育機関の産物だった。

これらの若者たちから、現代世界に乗り出そうとする日本の道徳的・精神的方向を変えようとしてモデルとしたのが、こういう教育機関であつたこともまた想像に難くない。同志社が八人の学生でもって出発したときは、新島がのちほど言った言葉では、彼は「この養成所」を建てようとして懸命になっていたのであつた。しかし、いったい何時、彼がこの考えを抱いたかは不明である。当の本人ですら、事実が確立したあとで先見の明があらわれる、ということがありがちである。

同志社という考えはもったさかのほつて、特定の日付を指定することができない。すなわち、一八七四年十月九日金曜日は、四日間にわたるアメリカン・ボードの第六十五回年次大会の最終日だった。最終日のならわしとして、海外伝道に従事する新人たちが紹介され、おもな人々には演説する機会が与えられるのであつた。自発的なスピールによる拠金として五千ドルが集まったのは、まさしくこのときであつた。

こんにちまで現存する唯一の説明と考えられている詳細は、新島自身の記述と、当時その場に居合わせた人々の口伝えによる記憶にもとづくものである。しかしながら、彼は、これを事件の十五年のちにあたる一八八九年に、デイヴィスが新島の書いた最後の英文の手紙だと主張する手紙の中に書いているのである。新島自身の言葉は A・S・ハーディーの書物によれば次の通りである。

「ハーディー氏は余り成功の見込みはないだろうという意見でした。しかしながら、私はむしろ我意を通してみたい、と主張しました。何故ならこれこそは、そのようなクリスチャンの大集会にそうした問題を持ち出す最後のチャンスだったからです。するとハーディー氏はほおえみながら、やさしい、慈父のような態度でこう言いました。『ジョゼフ、わたしはどうもおぼつかないと思うのだが、まあやってみるか。』この同意をうけるとすぐに私は宿舎に帰り、演説の原稿を作ろうとしました。ところが心臓が高鳴り、十分な準備はとできません。私は神に祈りました。私はそのとき神と格闘したあわれなヤコブのような状態であつたのです。翌日いよいよ演壇に立ちます

と、覚えた筈の言葉がほとんど思い出せないのです。私には演説の経験としてはないも同然でありましたから。しかし一分間ほどすると私は自分をとり戻しました。がくがく震えていた膝もしゃんとしてきました。新しい考えが心の中にひらめき、私は用意した言葉とは全くちがったことをしゃべりました。演説は全部で十五分間も続かなかったと思います。話していくうち日本に同胞に対する強烈な感情に動かされていきました。私は結局、同胞のために語る代わりに、さめざめと涙を流したのです。しかしながら、私の貧しい演説を終わる前に、日本でキリスト教主義の大学をたてるために、その場でただちに約五千ドルの寄付金の約束を与えられたのであります。⁵」

デイヴィスの記述は、語句と句読点の面で若干の異同はあるが、ほとんど同一のものである。ただし彼は上に引用した部分にあと一文をつけ加えているが、これは新島自身よりはデイヴィスらしくひびく。

「わがアメリカの友人諸君の寛大な寄付金が、現在の同志社の中核となり、今や同志社は日本で最良かつ最大のキリスト教の学校であると認められています。⁶」

「新島の演説の記録は残っていない。あの行動はあらかじめ計画されたものでなく、人の意表をつくものであった。それに続く措置はボードの措置ともいにくいものであり、従って主事の議事録にもつていない。しかしその場に居合わせた人はすべてその演説の強烈なまじめさに感じ入り、生涯忘れること

のできない場面として語り草となっている。アピールに対する答が得られるまでは着席することを拒否し、お願いしている金を得ることなしに日本に帰るつもりはないこと、またそれを得るまで演壇に立ち続けることを宣言したとき、彼の感情にさらわれたかのように、聴衆はこの若い日本人にうならされたのであった。ワシントンのピーター・パーカー氏が立ち上がり、千ドルを寄付する約束をした。ヴァーモント州の前知事ベージ氏とニュー・ヨークのウィリアム・E・ドッジ氏が同額の約束をし、新島の話が終るまでに、彼の白日夢は現実となったのであった。」

デイヴィスの方は次のように書いています。

「筆者はあの大出に出席した多くの友人たちから、それが終生忘れることのできない情景であったと聞かされたものであった。この若い日本人は熱情と誠実さをもってキリスト教主義教育の偉大な祝福を語り、かすれた声とあふれる涙とをもって、日本国民がどのような暗闇の中にあつて何を欲しているかを描いてみせた。この男らしい訴えに並み居る主事たちは狼狽の色を隠すことができなかった。彼はこう訴えたのである。

『私はキリスト教主義の大学を建てる金なしには日本に帰ることができません。それを得るまでこの演壇の前に立たせて頂きます。するとヴァーモント州のベージ知事が立ち上がって『千ドル申し込みます』と言った。ワシントンのパーカー博士が続いて五百ドルを申し込み、ハーディー氏五百ドル、ウィリアム・E・ドッジ氏五百ドル、以下次々に申し込みがあり、こう

しては、五千ドルが集まったのであった。」

おもな寄付者の寄付額についてくいちがいが見出されるけれども、この記述は、のちに同志社となったものの創立に向けての最初の具体的な動きとして伝えられてきたものである。最近、ヴァーモント州のラットランドを訪ねる機会にめぐまれ、一八七四年十月九日の大会が開かれた組合教会をさがしあてることができた。それはその町の目抜き場所に立っているきれいな会堂であった。現在の牧師であるデイヴィッド・ジョゼフ・ディーン氏は、この教会の歴史にまつわるこの劇的なエピソードについて何一つ聞いたことがないということであった。実のところ、私がこの訪問をしたのは一八七四年十一月のこと、あの出来事からは百年目のことであった。ディーン牧師はこの物語に感激し、聖所には錠が下りていたが、牧師は親切にも裏ドアをあけ、広々とした、整備のゆきといた礼拝堂を案内してくれた。実際のところ、一八八〇年には人口七、五〇二人の町だったから一八七四年当時ではもっと少なかったと思われるラットランド程度の町にしては、驚くほど大きな会堂であった。廊下には例の大会が開かれた当時のものにはちがいない内部の写真があったが、その後会堂は模様替えされており、残念ながら、新島が、彼の「白日夢」が可能になるまでは動かないと述べた実際の舞台は変更されている。それでもなお、それは印象的な礼拝堂であって、補助席を用いれば優に千人は坐ることができるかと思われる。

私は通りすがりに立寄っただけであったので、そこできいまを告げた。しかし私はサバティカルの期間を送っているハーヴァードに

帰ったならば、新島に關する資料を牧師に送ることを約束した。牧師の方でも古文書保管係の助けを借りて、教会記録の中でその出来事について調べてみようと言ってくれた。私はハーディーの記述をゼロックスしてすぐ送った。そのうち丁寧な返事が来たが、それには、教会には記録がないが、もっと探してみたい、とあった。京都にもどってしばらくして私は一八七四年十月十五日付の『ラットランド・ウィークリー・ヘラルド』の写真を受け取った。それにはアメリカン・ボードの第六十五回年次大会のくわしい記述がのっていた。はたせるかな、それはあの最後の、クライマックスとなった集会の記録であり、新島のエピソードについて一人の観察者が記録した、これまでに発見された最も完全な第三者の記述なのであった。それを次にかかげよう。

Rutland Weekly Herald 一八七四年十月十五日木曜第二頁

次にクラーク博士はこの機会に組合教会における第四日最終日の送別の集会に告別のスピーチをする人々として：：イェール大学および神学校の卒業生であり、コネティカット州のマウント・カルメル教会牧師である J・H・デフォレスト氏、ならびに、アーモスト大学およびアンドーヴァー神学校の卒業生であるジョゼフ・ニーシマ氏を紹介した。：：N・G・クラーク博士は次いで、宣教師として任地に赴こうとしている人々の名前を紹介した。：：来週出版するのは、日本向けには、J・H・デフォレスト夫妻、A・H・アダムズ博士夫妻、ジョゼフ・ニーシマ氏である。：：次にアルフユース・ハーディー氏が日

本のジョゼフ・ニーシマ氏を紹介した。

十年前、日本はまだ全世界に対して鎖国の状態にありましたが、当時十九歳の、大小の帯刀を許された武士の息子がおりましたが、この若者は何隻かのアメリカの船を見て、この船の背後には自分の国にあるどんな力よりも偉大なものがあるにちがいないと考えました。数冊のオランダの本、またアメリカの本の漢訳を何冊か手に入れ、最後に聖書の部分訳を読んでみて、若者はこの力の秘密が、「はじめに神は天と地とを創造された」という創世記の最初の一節にあることを発見したのであります。彼はアメリカへ渡りたいと望みましたが、彼の父はこれを許そうとせず、かえってそのような願いをおこしたというので彼を罰するという有様でした。とうとう若者は一隻の船にのせてもらうことになりました。しかし船長は彼をつれていくことができなくなり、遂に彼はボストンの船に乗り換え、こうしてこの国にたどりついたのであります。そこで彼はその船の持ち主に紹介されました。結局その持主は彼をフィリップス高等学校、アモスト大学、アンドーヴァー神学校へと送ったのであります。日本の使節団がこの国に来ましたさいに、この日本の若者は赦しを与えられ、しかも使節団の秘書役として働くよう求められたのです。

こんにち、彼の祖国が採用した教育制度が実施に移されていきますのは、まさしくこの若い日本人のおかげなのです。日本が世界の最も進歩的な国々に伍していけるほどの、あの教育的な動きを考えた頭、そしてそれを始動させた手は、実に彼の

頭であり、彼の手であったのであります。さあ、彼自身が今語ることをお聞きください。

このときW・E・ドッジ氏が立ちあがり、ただ今の発言者は謙遜にも、その若い日本人を家庭にうけいれ、教育を与えたのはアルフュース・ハーデーイその人であったことを言わずにすまされた、と述べた。

紹介をうけたジョゼフ・ニーシマ氏は次のように語った。救主は弟子たちと別れるにさいし、行つて福音を述べ伝えよ、と命ぜられました。しかし悲しいことに、このご命令に喜んで従おうとするクリスチャンの数は何と少ないことではありません。けれどもこの協会の皆さんはそういう人々ではありません。何となれば、もしこの協会が存在しなかったならば、私はこんにちもなお異教徒のままであり、私の祖国には何の希望もなかったであります。もしもこの国のクリスチャンが、そのもてるものほんの僅かなりとも与え続けるならば、私の同胞は、いのちのかてをあてがわれることになるのです。

私の国は三百人の学生を世界のさまざまな部分に派遣し、その地の与えうる最上のものを学ばせようとしてきました。残念ながら、彼らの大部分はヨーロッパの不信仰の影響の下にあります。しかし私たちは教育以上のものを必要としています。私の祖国には靈的な教えがどうしても必要です。日本はアメリカのいちばん下の娘、ないしは、ひよわな妹です。それでも今日本はすでに自活しつつあります。

日本のような国では悪魔ははやばやと種子をまくのです。で

すから私たちは悪魔を出しぬいて、福音の種子をまかななくてはなりません。

神戸の教会は教育機関がありません。その教会には何らかの学校が必要です。日本人にとって金をねだるほどいやしいことはありません。しかし私たちは今ねだらねばなりません。キリストも、求めよ、さらば与えられん、と言われましたから。それ故に私は皆さんに対し、約三三三万人を助けるための教師と説教者を起こすべく、養成所を設立するに充分な程度のご援助をおねがい致します。

お願いできますでしょうか？ お約束を得られるまで私は着席いたしません。

以前、中国伝道に従事していたピーター・パーカー氏が立ち、千ドル約束します、と言った。

ニーシマ氏は続けて言った。私はゆうべこのことで眠れませんでした。しかし今夜はよく眠れます。

ヴァーモント州の一婦人が百ドルの約束をした。

ニーシマ氏は言った。私は十万ドルひっさげて帰るくらいに頑健でありますが。

マサチューセッツ州の一婦人が五十ドルの約束をした。

ニーシマ氏は言った。私はあなた方の富を十分に拝見しました。しかしあなた方の力はキリスト教からきたものです。私は同じことを日本のために求めております。

マサチューセッツ州の一婦人が百ドル、ロード・アイランド州の一婦人が百ドルを約束した。

次にペイズ知事が言った。ヴァーモントも仲間に入れて頂きたい。私は千ドル約束します。

ニーシマ氏は続けた。私はもっと申し上げたいのですが、胸がいっぱいで言えません。沢山の友人に別れを告げるのはつらいことです。昼間の光の中からあけ方の灰色へと進むことはきびしいことです。しかし私は天上のエルサレムから地上のエルサレムへと下り給うた私の救い主をみならねばなりません。主につき従い、もう泣くことをやめたいと思います。

そしてニーシマ氏は日本語で主の祈りを唱えた。ダートマスのスミス博士が決議文を読みあげた。

決議。ボストンのアルフュース・ハーディー氏は、日本に、日本人説教者とクリスチャンの教師を養成する学校をたてるための基金の会計となるよう要請せられた。またそのための支援金は同氏あてに送られるべきこと。

この五千ドルの内分けは少しづつ違ふのだが、それぞれのものは新島の言葉から発しているとみられる。ちなみにここにいくつかの例をあげてみると、「帰国の上日本に一の学校を設立致度宿望を吐露し」：「友人博士パーク氏、忽ち颯声して五千金を寄付せんと呼べり、继而ウエルモンド州の旧知事ペーシ氏も亦千金を寄付し、その他或は五百金、或は二百金、百金、以て五十金、三十金、二金一金の微に至り、五六分時を出ずして積んで数千の額に上れり。」

〔青山霞村「同志社五十年裏面史」一九三一年、京都、博信堂、p. 30-31〕

「新島氏も予今子が設立せんとする学校の爲に一千弗を寄付すべし」と是なん華盛頓府の貴紳医学博士パーカ氏にてありし其言未だ畢らざるに碧山州前知事ペーシ氏も亦起て一千弗を寄付するの約を爲せり之に次ぎ五百弗三百弗二百一百或は五十三十弗贈与の約ありて静爾たる」(同志社設立の始末)(一八八三)『新島先生書簡集』(正篇) 森中章光編、一九四二年、京都、同志社校友会、p. 1142-3)

「十五分間にも満たざる此演説に因つて、満場は全く魅せられた。華盛頓の医学博士パーカー氏(Hon. Peter Parker)は立つて、『新島氏よ、吾れ一千弗を寄付せん』と叫んだ。緑山州の前知事(Page)も亦立つて一千弗を叫ばれた。紐育のドッチ氏(Wm. E. Dodge)も亦一千弗を寄付された。続いて五百弗、百弗、五十弗! 等、等、等の各隔より叫ばれた。忽ちにして五千余弗の資金が成立した。』(同志社五十年史)一九三〇年、京都、p. 42)

「予帰朝の後必ラス一ノ大学ヲ設立シ以本邦ニ竭ス所アラントス満場ノ朋友ヨ何人カ予ノ心情ヲ了察シ予ノ素志ヲ賛成スル者アルノ且演ヘ且問ヒ抗慨悲歎ノ余リノ不覺數行ノ感涙ヲ壇上ニ注ソキ演説ヲ中止スル事殆ト二三分時間ナリキ時ニ華盛頓府ノ住人医学博士パーカ氏ナル者予ノ背後ヨリ直ニ起立シ大声ヲ發シ新島氏学校ノ爲ニ一千弗ヲ寄付スヘシト。続テ碧山州前知事ペーシ君モ起テ一千弗寄付ノ約ヲ為セリ又続テ五百弗、三百弗、二百、一百或ハ五十或ハ三十弗ノ約アリテ満場歡呼ノ声恰モ沸カ如シ場中漸ク沈静スルニ及ビ予丁寧ニ良朋ノ好意ヲ謝シ且別ヲ告ケテ演説ヲ終」(同志社学校設立の由来稿)(一八八二)『新島先生書簡集』(続篇) 森中章光編、一九六〇年、京都、学校法人同志社、校友会 pp. 274-5)

「このとき最初にワシントンの医学博士パーカー Peter Parker 一千弗を申込み、次いで前パーモント州の知事であったページ Page より一千弗、ウィリアム William、ドッジ E. Dodge [「ド」]より五百弗、以下三百、二百、一百、五十と続々申込まれる。』(新島先生生詳年譜) 森中章光編、一九五九年、京都、学校法人同志社、同志社校友会 p. 36) となっている。

「五千余弗、となつたり、"about five thousand dollars" (Nesima), "Nearly five thousand dollars" (Davis) とある。ハーディー氏がこの募金の会計の役をさすかた以上自分も五百ドルだしたとなっている記録もあるが、多分合計五千ドルになるようクリスチャン・ビジネスマンらしく出したのではなからうかと考えられる。この大物寄付者のうち今まで一番知られていなかったのは John Boardman Page (二八二六—一八八五) であり、彼は知事 (Governor) や Gov) と記されたり、前知事と記されたりする。今の言葉でして言うならば元知事があっているが、アメリカでは一たん知事の地位までいくと、「生涯 "Governor" と呼ばれるのが慣例である。ページはヴァーモント州の第三十一代知事として、一八六七—一八九の期間に職したのであった。彼はもともと商売人であり、銀行経営にも手をのび、National Bank of Rutland の頭取をつとめた。州議会にも若い時から出ており (一八五二—五四)、一八六〇—六六年には州の Treasurer という会計責任者をも勤めた。ラットランドにある計器をつくる会社の会計部長をも経ている。

Peter Parker (一八〇四—一八八八) は東洋と大いに関係があり、幕末期に日本にも来ようとしたことがある。彼は一八二七—一三〇年ア

イモスト大学に学び、イェール大学にうつって、神学並びに医学を勉強し、一八三四年に卒業した。支那の南の広東で宣教師として、診療所を開き、結婚してからつれていった奥さんは、カントンに住んだ最初の西洋婦人と言われた。外交の方にも手をのびし、公使代理を勤め、一八四四年の条約の改正に合衆国全権をつとめた。パーカー家は裕福であつて、彼は一生をつらぬいてキリスト教関係の運動に手を貸し、献金もすすんでした人であつた。なお、くわしくはデイヴィス（北垣宗治訳『新島襄の生涯』（一九七五）の一九八頁の注を参照されたい。

William Earl Dodge（一八〇五—一八八三）は熱心なクリスチャン・レイマンであつて、裕福であつた家の財産を次々にキリスト教や慈善事業のために惜しみなく出した。彼はイリー鉄道最初の発起人兼重役であり、自分の家の富を鉄鋼、石炭の方面に向け、事業家として名がとおつていた。一八六五—一八六七年に国会議員に当選し、外交専門の委員の一メンバーだつた。一方ユニオン神学校やニュー・ヨーク市立大学の評議員、又アメリカ聖書協会の副会長をはじめ、かすかすの文化的、宗教的な団体に名をかした。この三者ともアメリカン・ボードの有力な後援者であり、発起人だつた。

たぶん若干の観察と説明がここで必要かと思う。アメリカン・ボードの第六十五回年次大会を、比較的辺鄙なラットランドで開いたことは一種の新機軸だつた。それより二、三年前にはマサチューセッツ州セイラムで開かれたが、これはボストンからたやすく行ける場所だつた。

ラットランドは鉄道の分岐点に当り、かつてはヴァーモント州の

首都だつた。この州は最初十三あつた州の独立宣言に引続いて後、第十四番目の州として合衆国に加わるまで、十四年間にわたつて一個の共和国だつたのである。ラットランドそのものは、もともとコネティカット川流域とシャンプレイン湖とを結ぶ將軍シェフリー・アーモスト卿の軍事道路のために設けられた軍隊駐留地として作られたのであつた。町はその後製産工場や印刷の中心地として発達し、同時に世界で最も深い大理石採石所を近くにもつようになった。ヴァーモント産大理石は合衆国の全体にわたり、広く記念建造物等に用いられた。大きな組合教会以外にも、相当立派なバプテスタ教会やメソヂスト教会があり、これらにはあふれた人々や、その他の諸会合に利用されたことと思われる。鉄道会社は朝晩特別列車を走らせた。組合教会の新しいチャペルも大いに利用された。公式レポートによれば、八十五ボード団員と二八九名の名譽男性会員が登録している。一五〇〇名が委員会のあつせんで宿舍を提供され、他の何人かの人々がホテルや友人宅に宿泊した。「ラットランド集會が決定的に成功したということは、ボードの集會を何も国内の大都市に限る必要はないのであつて、小さな町でもその特権を享受でき、そのような集會の与える喜びと利益に参加できるということを示した。…この集會は全くすばらしいものであつた。すべての…討論…において表現された精神は、心をわきたすほどの約束に満ちたものだつた。キリストに対する関心、キリストへの献身と奉仕の精神は日増しに深められたように見えた。金曜日朝のお別れの集會は、その種のものとしては最上のものの一つであると感ぜられた」¹⁰翌年の開催地はシカゴと定められた。しかしラットランドは

アメリカン・ボードの名を宣伝し、しかもヴァーモントの田舎の信仰ある人々の関心を高めるためにあつかつて力があつた。(今日ラットランドは多くの日本の読者にとって、チャールズ・E・タトルという出版屋のアメリカの根拠地として知られているにちがいない。第二次大戦以降、この会社はチャールズ・E・タトル商会と、その「東と西に橋をかける書物」とをを通して、大いに書物を出版してきた。ところで『ラットランド・ウィークリー・ヘルド』を出版していたのはタトル氏の祖父であつた。彼の出版する本には発行所として「ヴァーモント州ラットランド／日本・東京」とたえず記されている。)

ハーディーの記録によると、新島は説教者・教師養成所建設のための資金を求めてアピールをしてみようかという考えについて、「クラーク総主事ならびにハーディー氏に相談した。しかし、あまりたいした激励は得られなかつた。」この『ラットランド・ウィークリー・ヘルド』が教えるところでは、ハーディー氏は集会の決議により「日本に、日本人説教者とクリスチャンの教師を養成する学校をたてるための基金の会計となること、またそのための支援金は同氏あて送られるべきこと」になつたのであつた。このことは同志社のちの歴史で論争点となつたのであるから、ここで寄付金懇請、特に主催者の公的な同意を得ずに行われる場合に関して、ボードがどういふ立場にあつたかに言及しておくことが適當であらう。組合教会の特定な形態と、アメリカン・ボードの発生状況からすれば、寄付金の懇請は特別に微妙な問題であつた。組合教会の伝統によれば、各個教会と会衆とは、自分自身と神以外に何の恩恵もこうむらないことになつてゐた。故に、与えるか否かを会衆が決定するのは、全くのところその各教会次第だったのである。分担金とか分

担率が上から強制的に割りあてられるといつたことはありえなかつた。こういうわけで、組合教会の伝道部門たるアメリカン・ボードは、全くのところ、黙諾の上に存在してゐたのである。特定の目的のための余分の寄付金懇請は、拠金のパターンの全体に影響を与えることになるのであつた。人々は気前のよさに対する劇的なアピールに動かされるのだが、長い目で見た場合、人々が余分の気前のよさを發揮するよう動かされるかどうかは一層疑わしいのである。

N・G・クラーク総主事のような教派の指導者たちは、このよつな「教派の生命にかかわる事実」、特に組合教会の場合のことは十分に心得てゐた。こういうわけで、クラーク博士はあまり激励を与えなかつたのであると思ふ。というのは、余分になされるアピールは、たとい成功するにしても、信者の平常の定期的な献金に対する意欲を鈍らせるため、献金総額に影響することがありえたからである。また、行政の立場にある人としては、目先のきく人ならば、このめざましいアピールの成果を、長期的なプランの中に組み入れようとしたことは当然であつたらう。もちろん、事實はその通りになつたのであつた。

同志社の立場からすれば、新島によつてあのようによめざましい仕方では集められた五千ドルを、のちほど、同志社自身のものと考えたのは当然すぎるほどのことであつた。ボードの立場からすれば、あの金は日本におけるキリスト教化事業と、世界中に神の仕事を拡めるといふ大事業の総体の、欠くことのできない一部分ということになるのであつた。

ヴァーモント州ラットランドの組合教会は一七八八年に創立され

た。現在の教会堂は一八六〇年に建てられたものである。一九七フ
イト（五十メートル以上）の尖塔は英国の偉大な建築家サー・ク
リストファー・レンの設計の写しである。一八九二年に内部が大規
模に改変された。すなわち両側のバルコニーが拡大され、階上聖歌
隊席とオルガンは後方のバルコニーから前方へと移された。¹²

しばらくの間新島は自分の名前をハイフン入りで Nee-Sima と綴
っていたが、『ラットランド・ウィークリー・ヘラルド』では一貫
して Rev. Joseph Nee Sima と綴られている。これは彼の用いた
いちばん初期の綴り方なのである。ただし、この時期までくると、
新島は、その後生涯にわたって使うことになった Neesima という
綴りを用いるようになっていた。¹³『ヘラルド』がどこからこの綴り
方を取ってきたのかはわからない。『ザ・ミッションナリー・ヘラル
ド』の公式の記述には一貫して Rev. Joseph Neesima と綴られて
いる。

あの出来事以来、紙の上でも法延でもはげしい論争がまき起こっ
た事実にかんがみ、新島があの「教育機関」をまず神戸に作るつも
りだったことに注目するねうちがある。実はこれは自然の成り行き
であった。なぜならアメリカン・ボードの最初の宣教師グリーンが
そこに定住し、当時神戸はアメリカン・ボードの事業の中心地であ
ったからであった。そして、責任ある仕方て記録を分析してみれ
ば、ミッションの考え方が神戸から大阪へ、そして最後に京都、と
いう風に進展していったのである。

新島の表現には一層温かい調子が見られる。すなわち彼はアメリ
カ人が演説にすら共通するユーモアの傾向をもち、それを一瞬にし

て見分けるのだということを心得ていたからである。彼はパーカー
の手始めの約束をうけると、今夜はよく眠れますという、感謝のこ
もった安堵の念をもらした。また彼が「十万ドルをもって帰る」に
十分なだけ頑健です、と言う時、たしかに彼は主の御用のための才
能を欠いていなかった。ここにちょっとした客引きの才を見ることが
さえできよう。それでも、彼は根本のところでも「いい——」あ
なた方の富」と「キリスト教からきた」あなた方の霊的な「力」と
の間にあるはつきりとした区別を彼は見抜いていた。次に彼は「日
本に対しても同じことを」、霊的かつ国民的な力への明治的関心と
して、願う求めたのである。ページ前知事は「ヴァーモントも仲間
に入れて頂きたい」という発言によって、ちょっとしたアメリカ的
傾向を示し、千ドルの約束をした。そこで新島は、精神的な調子で
首尾よく終った——別れの苦痛と希望の必要、そして日本語による
主の祈りを加えることによって。彼はたしかにアーモストとアンド
ーヴァーで、彼のレトリックの授業を十分に受けていたといえる。
『ヘラルド』の記事を熟読すると、はつきりと確認される関連事
項は少なくない。たとえば、アンナ・シーリー・エマソンの記述に
もかかわらず、最終日の議長席についたのはウィリアムズ大学の有
能で敬愛された総長マーク・ホプキンス博士¹⁴だったのである。彼は
長年にわたってアメリカン・ボードの総会議長であり、ラットラン
ドで再任されたのであった。この年次大会で起こったことの歴史的
意義と、百周年を迎えた同志社の発展は今になってこそわれわれを
考えさせ、われわれにうったえる力があるように思われる。

（大学文学部教授・米國文化史・アーモスト大学代表）

(注)

- 1 *Rutland Weekly Herald*, Vol. 80, No. 42, October 15, 1875.
- 2 Otis Cary: *A History of Christianity in Japan—Protestant Missions*, New York, Fleming H. Revell Company, 1909, p. 119.
- 3 同志社校友同窓会報, 第3号, 大正15年11月15日, の本間重慶の手記
- 4 *Rutland Weekly Herald*, Vol. 80, No. 42, October 15, 1875.
- 5 A. S. Hardy: *Life and Letters of Joseph Hardy Neesima*, Boston, Houghton, Mifflin and Company, 1892, p. 172.
- 6 J. D. Davis: *A Sketch of the Life of Rev. Joseph Hardy Neesima LL. D.*, New York, Fleming H. Revell Company, 1894, p. 43.
- 7 *The Missionary Herald* の, 正式と言ってもよい報告には Rev. Joseph Neesima, a native of Japan, and about to return there (who was introduced by Hon. Alpheus Hardy, briefly stating some of the singular facts of his history) としか表われない。そのほかには日本に関することは次の文以外にはない。The Committee on the Japan mission referred to many of the cheering facts noticed in the report, and said:—The history of the mission for the past year has been one of constant and most cheering progress. It is a remarkable fact that of the nine male members of the church organized in Kobe, *eight* wish to preach the gospel, and of the seven members at Osaka more than half also desire the same good work; and this, obviously, not from a desire to find employment and obtain support from the missionary treasury. The readiness of the Japanese converts to assume the support of their own religious institutions is exceedingly gratifying. Dr. Berry's medical work has shown itself wonderfully fitted to open the way for direct Christian labors. 列席者の名簿の中に *Foreign Lands* の5人の1人として Rev. Joseph Neesima, Kobe, Japan. とあがっている。他の4人はみなアメリカ人で有名な宣教師であった。Cyrus Hamlin, D.D., Constantinople, Turkey や Daniel Bliss, D.D., Syria がある。このプリズ博士は後の American University of Beirut の設立者でもあってアーモスト大学の1854年の卒業生であった。
- 8 A. S. Hardy: *Life and Letters of Joseph Hardy Neesima*, Boston, Houghton, Mifflin and Company, 1892, pp. 172-3.
- 9 J. D. Davis: *A Sketch of the Life of Rev. Joseph Hardy Neesima, LL. D.*, New York, Fleming H. Revell Company, 1894, p. 43.
- 10 *Missionary Herald*, Vol. LXX.—Nov. 1874—No. XI, p. 358.
- 11 A. S. Hardy: *Life and Letters of Joseph Hardy Neesima*, Boston, Houghton, Mifflin and Company, 1892, p. 172.
- 12 A. J. Anderson: "A Brief History of Grace Congregational United Church of Christ of Rutland, Vermont on the occasion of The 180th Annual Meeting of the Vermont Conference of the United Church of Christ, Inc." 1975.
なお14年後に新島が「国民の友」に発表した「同志社大学設立の旨意」に3,000人あまりの「米国の紳士貴女」と書いているが、実際この教会に入ることのできたのはつめて1,500人(席に1,000人, 補助席500人)と『ヘラルド』および世話の委員会の報告書には記されている。
- 13 See Otis Cary: 「新島とシーラー (I)」基督教研究 第29巻 第1号, 1956年3月, p. 42①.
- 14 Mark HOPKINS (1802-1887) は1830年から生涯マサチューセッツ州の最も北西の地にある Williams College に献身した。なお1836-1872の36年間総長をつとめた。彼はピューリタニズムと進歩主義をだきあわせた道徳的思想家であって、財産や富を蓄積すると共に、キリスト教的な責任をもった管理をすることを強調した。ウィリアムズ大学はアメリカのプロテスタントの宣教運動の発生の地で、それは1806年に暴風をさけるため、干し草の陰にかくれて祈った5人の学生が海外宣教の案と約束を生んだのであった。ホプキンス総長はくり返しアメリカン・ボードの名誉ある議長役に選ばれるのが慣例となるほどであった。

ラットランドの式典

北垣宗治

このたび、同志社の創立百年を記念して、グレイス教会に記念タブレットを贈呈し、新島の歴史的な演説の場所を長く後世に伝えようという計画がおこり、和英両文による碑文が起草された。銅板タブレット作製の費用は、東京とラットランドで出版事業を経営しているチャールズ・E・タトル氏が引受けて下さることになった。また記念タブレットの贈呈式はグレイス教会のディーン牧師のもとで計画され、一九七六年六月二七日(日曜日)の礼拝のあと、ということにきまった。

この式典に同志社を代表し、海を越えて出席したのは松山義則大学長とケリー教授であった。その他のゲストとしては、在米の校友同窓十数名とその家族、アメリカン・ボードの後身であるUCBWMの代表、フィリップス・アカデミーのマックレイン理事長、アーモスト大学、アンドーヴァー・ニュートン神学校の各代表、タトル氏夫妻、アルフユース

・ハーディー氏の曾孫にあたるゲルストン・ハーディー氏、かつての同志社宣教師ジョン・ヤング氏らの姿が見られた。アーモスト大学代表の一人はアーモストのシーリー総長の孫にあたるジュリアス・シーリー・ビックスラー博士(もとコルビー大学総長、いま一人はイエール大学の著名な日本史家であるジョン・W・ホール教授であった)。

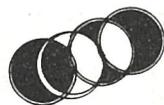
客の大多数は前日のうちに到着し、ディーン牧師の完璧なお膳立てにより、教会員の宅に分宿した。その晩には教会員ウィリアム・ホワイト氏の庭園で盛大な歓迎会が催された。

日曜日はこちらからと晴れあがり、涼しく、すがすがしい朝であった。グレイス教会の白い尖塔が青空を背景にくっきりと浮かんでいて、「同志社記念礼拝」はディーン牧師司式のもとにおごそかにとりおこなわれた。プログラムに従い「父のみかみに」は日本語で斉唱。UCBWMの最高の責任者であるデイヴ

イッド・M・ストウ博士が新島の輝かしい生涯を例にひきつつ説教。献金と賛美歌のあと、松山学長、ケリー教授、北垣が登壇した。百二年前に新島が「お願いできましようか？お約束が得られるまで私は着席いたしません」と叫んだその場所である。ケリー教授がタブレット贈呈のいきさつを聴衆に説明したのち、松山学長が立って、声涙ともにくだる贈呈のことは述べた。通訳を北垣が担当した。教会を代表してデニー・コ克蘭氏がタブレットを受理し、贈呈の祈りをビックスラー博士がささげ、賛美歌ののちヤング宣教師の祝詞をもって、同志社記念礼拝はとどおりなく終了した。

このタブレットは会堂の前にすえるのがよいという声もあったが、大事な記念碑が盗難にあってはまずいという教会側の意見が出て、これは会堂内の壁にはめこまれることになるもようである。将来ラットランドを訪れる人は、ハイウェイで町に入るとき、他の塔にぬきんで高いあの壮大な白い尖塔を目標にするよ。教会の会議室には新島の肖像写真もかけられている。長らく教会の倉庫に眠っていたものが今回みつかったのである。いったい誰が、いつ、この写真をこの教会に送ったのであろうか？それは次の歴史家にまかせることにしよう。(大学文学部教授)

同志社教会創立百周年を迎えて



藤代泰三

「学校の近くに教会の尖塔の立っている

かぎり

懐疑家の小さい手を恐れないし

教会の尖塔の近くに学校の立っている

かぎり

盲目的迷信家の支配を恐れない

」

これは新島先生の恩師アンドヴァー神学校のパーク博士の説教に引用された詩である。ここでパークは教育とキリスト教は両立するものであるばかりか、この両者は相補って人間を完成に導くものとおうとしているように思われる。徹底的な理性による諸学の探究とともに永遠への思慕があれば、懐疑主義が人間をむし

ばむことはないであろうし、熱烈な宗教的情熱に生きるとともに物事を冷静に理性的にみるのであれば、盲目的狂信に陥ることもないであろう。教育と宗教、あるいは理性と信仰といってもよいが、この両者は人間に欠くことのできないもの。

同志社創立当時、学内で聖書を教えることが府知事によって禁止されたので、聖書や神学に関する課程は余科といわれ、今のアーモスト館の敷地にあった、とうふ屋の二階で授業が行われたことは周知のところであろう。同志社とキリスト教教育、あるいはもっと端的に、同志社と聖書の教科という課題をめぐって、この学校の歴史は展開していったといっても過言ではないであろうし、このことは明治三〇年ころの徴兵猶予令の特典が学校から取りはずされるといふ出来事にも関連したし、また前の大戦中旧制

中学の礼拝や聖書の教科への府の圧迫とも関連して、私たちの先人は、ずいぶん苦闘したとき。同志社からキリスト教教育や聖書の教科をとり去れば、その存在はあつてなきに等しいもの。しかし公の教育機関である同志社では、生命のイエスの福音の伝達はむずかしかろう。

新島先生は、同志社創立の翌年一二月三日に、同志社教会を自身の自宅を仮会堂として創立され、同志社教育の完成を祈られた。明治一年に教会は西南の役の戦災者に五円三七銭二厘五毛の寄付金を送ったが、このことは司馬遼太郎の「翔ぶが如く」で当時の模様について知りうるわれわれには感慨が深いし、また、あのような日本の状況下で教会の歩みが始められたことを思う。教会の歴史を読むと、よくまあここまで歩んできたものだとつくづく考えさせられる。かつては同志社と教会とは全く一つであつたと思われるほど、その関係は緊密であつたから、同志社のいばらの道はこの教会の歩みでもあつた。戦時中、学園や教会に対する軍部やその他の圧迫がことのほか厳しかったときも、日曜日の礼拝は続けられ、出席者が三名のときもあつたとか。

教会内では、この教会は学園を対象にした教会であるのか、それとも一般の人々のための教会であるのかという問題が、歴史のなかで周期的にといてもよいほど頭をもたげてきた。同志社の生徒の数が三〇〇名ほどであつた明治一九年の教会規約には、会員は同志社社員、教員およびその家族、並に生徒に限るとある。しかし大正一三年になると、規約は、本教会は本教会の趣旨を順守する者をもつて組織すると変つた。そののちも、この問題は

くども教会内で論議されてきた。しかし今では、これは学園の教会であるとともに一般の人々の教会となつていて、ここに集まる人々のなかには、他の諸学校の教員や学生生徒、実業家、技術者、主婦等もいる。

戦後、欧米への日本人の関心が深まるにつれて、教会の教勢はさかんになったが、一九六九年ころの全国の大学紛争や諸教会の思想的実践的混乱のなかで、この教会もまた大いに動揺し反省をつづけた。一体イエスの福音とはなんであろうか、それはわれわれ人間の生の営みにどのようにかわるのであるか、戦争責任の問題はどうなのか、万国博覧会開催への教団の協力はどういうことであつたのか、靖国神社国営問題に教会はどのようにとりくまなければならぬのか、日米安保条約やベトナム問題はどうなのか、教会青年の問いかけに他の教会員も自問自答したし、またそこに激しいやりとりもあつた。私は、これらの問題への解答が明確な形でできたとは思わないし、なかには人類が存在するかぎり、いつまでも問いつづけねばならない問題もある。教会紛争をさかいとして教会を去つていった青年もいるし、これから速のいた者もいる。

今、私たちは教会の新しい世紀の始めに立ち、過去のすべての教会の体験をふまえ、聖書のみことばにききながら、その使命と責任について考えている。

(大学神学部教授・キリスト教史)

明治期・テキサスの日本人米作者

——西原清東・片山潜・星名謙一郎をめぐって——

飯田耕二郎

駒場を出でて二十年

今じゃテキサス大地主

秋に小鹿が鳴くころは

黄金の波が九万町

古い頃の日本人移民のみならず、日本内地の学生の間でこんな歌がはやったという。それは、移住者の誇りであり、青年の理想であった。明治期のテキサス州には、日本から資本家の進出がつつき、当時の「テキサス大地主」の夢を結はしめた。第四代同志社社長の西原清東こそ、その先駆者である。筆者は、以前より各地の日本人移住者に興味をもっていたが、最近になって、外務省通商局の『明治四十三年・移民調査報告』を読む

うち、テキサスの米作者として、西原の他に、星名謙一郎、片山潜らの名を見出し、彼らが同時期に米作を始めたことを知り得た。そこで入植の経緯を中心に、彼らの活動の様子を調べてみることにした。

* * *

西原清東は、文久元年（一八六〇）高知県に生まれ、立志社に学び、板垣退助、片岡健吉らとともに自由民権運動に参画、全国に遊説、講演を行なった。ことに福島県の三春正道館に講師に招かれ、彼に学んだ青年たちは、その後加波山事件の中心的な役割を果たした。そして彼は、弁護士を開業、神戸に出て、組合教会派の多聞教会においてクリスチャンとなり、明治三十

一年には、衆議院議員に選ばれ政界に活躍した。さらに、時の文部省がキリスト教主義の学校に対して徴兵猶予の特典を除外し、そのため危機に陥った同志社に、デヴィス博士や衆議院議長片岡健吉らの要請により、明治三十二年（一八九九）社長として就任、文部省と対決し、ついにこの法令を撤回させた。このあたりについては、同志社人物誌二十四、西原清東（同志社時報二十六、一九六七）にも詳しい。彼の社長時代は約三ヶ年におよんだが、明治三十五年（一九〇二）三月辞任し、政界も断念して、同年五月、単身で英国視察の後、米国に渡った。そしてニューヨークグランド六州の一つ、コネティカット州のハートフォード神学校に入学、二年間ここに在学して神学を勉強した。同窓生に同志社出身の村田勤らが出た。さて、彼がテキサスに移住する決意を固めたきっかけは、次のようである。おそらく一九〇三年秋の頃、ニューヨーク市で日本人留学生の大会が催され、彼も出席したが、ここでタカジアスターゼの発明者として有名な高峰讓吉博士が、日本人のアメリカ社会で活動することを説く講演を行い、これに深い感銘を受けるのである。ちょうどその頃、ニューヨーク駐在の内田総領事のもとに、テキサス州発展の一策として、農耕地を造成して日本人米作者を呼び寄せる計画が伝えられた。内田からこの話を聞き、そのために応じて移住を決意した訳である。彼が従来より、未開発地の開拓に希望を抱いていたことは、すでに明治二十八年、北海道の開拓に着目し、北見に「北光社」という開発団体をつくったことでも明らかである。彼は、内田とともに現地を視察した結果、

テキサス州ヒューストン郊外のウェブスターで、まず三百エーカー（約三〇ha）の土地を選んで購入し、開拓にかかった。そして日本にいる夫人や一人息子の清頭に渡米を促した。これがため、西原家は所有財産一切を処分して、日本種の米約四百俵をもって、明治三十七年（一九〇四）元旦、横浜出帆のアメリカ丸で渡米した。

* * *

それより三日前、すなわち明治三十六年十二月二十九日、同じ横浜港からアメリカに向けて発った一人の男がいた。片山潜である。彼は、いうまでもなく、日本の労働運動の創始者としてばかりでなく、世界の労働者から今にいたるまで懐かしがられている人物である。明治の初期、活版所の職工から、アメリカではコックなどをしながら、かつては新島襄が学んだアンドーヴァー神学校などで勉強し、帰国後、東京の神田三崎町にキングスレー館を設立し、セツルメント事業をはじめた。このころ、彼はグリーン博士など同志社関係者の協力を受けている。ミス・デントンも在京中は交遊があり、大いに世話をした。しかし片山は、キリスト教から次第に遠ざかり、社会労働運動の深みに入っていくのである。ところで、この第二回目の渡米の目的は、一九〇四年オランダのアムステルダムにおいて開催される万国社会党大会出席と、北米における日本人労働者の組織化にあった。シアトル到着後、西部各地で演説会にのぞみ、二月十四日テキサスのヒューストン市に着き、四月二十九日まで



西原清東

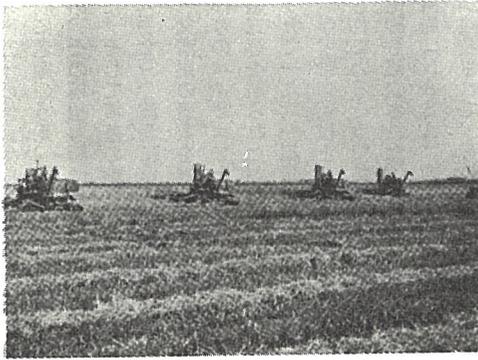
滞在している。こ
こには彼と同じ岡
山県出身の岡崎常
吉がレストランを
開いており、彼は
ここでトレイをさ
さげてウェイター
をしていたと伝え
られる。しかし、

この時すでに同地の米作を実地に研究するのが目的であり、西原農場を訪問したにちがいない。五月からはセントルイスで万国博覧会が開かれ、その日本館の仕事をしていた、作家の星新一の父親星一を二ヶ月ほど手伝っている。八月、オランダの万国社会党第六回大会に出席して、十月に再びヒューストンに戻った。彼は西原の計画に共鳴し、前回滞在のおり視察しておいた農場経営を、今度は岡崎と共同で実行しようと考えたのである。翌一九〇五年、オルデンという、ヒューストン市を去る十三マイルの一小村に、百六十エーカーの土地を買入れ、五十エーカーの植え付けを行なった。そして十二月、サンフランシスコで渡米中の幸徳秋水に会い、翌年一月に帰国した。それは社会主義運動を行なうためでなく、資金を調達して米作事業を本格化しようとしたのである。彼のバトロンであった親友の岩崎清七が中心となって出資した大日本興農株式会社が設立され、彼は七月、その事業監督のため第三回目の渡米をする。しかし

ながら、片山が形式上とはいえ、米国の社会主義者の名を借り、新会社をつくらうとしたことを岡崎が知って驚き、片山と別れて日本に帰り、会社を解散させたい。また一説には、岡崎が二十余名の農民を連れてサンフランシスコに到着した際、契約移民の疑いありとして移民官により解散させられ、農業労働者の導入計画が失敗し、これがもとで岡崎は片山との関係が面白くなかったともいわれている。ともあれ、片山のテキサス農場建設の計画は失敗に終わり、再び彼は日本の社会主義運動の中に現われることになる。

* * *

西原をたよって渡米し、テキサスで米作を行なった者の一人として、星名謙一郎の名もあげることができる。彼は愛媛県吉田の出身。東京青山学院の第一期生で、後に同志社に学ぶ。早くから大志を抱いてハワイに渡り、甘蔗のプランテーションなどの仕事をしていた。明治三十二年、愛媛県卯之町出身で同志社女学校に学んだ末光ヒサと同地で結婚。さらに明治三十六年、先輩の西原のいるテキサス州に移り、翌年「オルデン」で百六十エーカーの土地を買入れ、八十エーカーに作付を行なった。なおこれは西原農場の創設と同じ年で、「オルデン」は一年後に片山の入植した土地でもある。だが片山との関係など、彼のこの地での具体的ことは筆者には未だ不明であるが、日本米の試作はすこぶる順調だったようだ。また長男の泰は、同地で生まれた最初の日本人で、通称テキサスと呼ばれる



西原農場

る。妻のヒサのほうは、周知のごとく、母校の同志社にもどり、恩師でもあるデントン先生の世話と看護に生涯を捧げることになる。

* * *

さて西原農場については、一九〇四年の第一回は大豊作であった。三

に至った。しかしながら、事業の基礎の定まらんとする明治四十年、ヒサの父の病気のため、やむをえず農場を閉鎖し、親子三人で帰国したのである。その後の一家は松山に住んだが、謙一郎は日本に留まることを好まず、今度は南米開拓を思い立ち、単身ブラジルに渡る。一九一五年、彼はブラジルで最初の邦字紙「週刊南米」を発刊、さらにプレジョン植民地をおこす。サンパウロ市を隔たること八〇〇km、ソロカバナ線で日本人が開拓した最初の入植地であり、現在アルヴァレス・マッシュヤードと呼ばれ、地方小都市となっている。彼はこの地で一九二六年になくなるまで、日本人移民のために活躍したのであ

年つづき米作がみごとに成功をみたので、自信を得た西原は一九〇六年暮に帰国し、各地を講演してテキサス移住を促した。これに呼応して、郷里の農家のみならず、全国の有力資本家や名望家の子弟などが続々とテキサスへ行き、大規模な農場を建設し、米作を始めるようになった。そのなかには、九鬼、岩村両男爵の子息らもいた。このテキサス米作ブームは一九〇八年頃が最も盛んで、実に二千五百エーカーの大規模な米作を行なった者もいた。しかし一九一〇年にハリケーンが襲来し、多くの者は希望を失い、農場を閉鎖して日本へ帰った。むろん西原は踏み止まったが、単一経営の危険を緩和するため、温州蜜柑や棉花栽培の事業も営んだ。また、日本から西原農場を訪れる者も多く、政界、財界、宗教界、軍人など各方面にわたった。同志社関係では牧野虎次、大塚節治らがいる。テキサス農場経営の基礎が固まった一九一五年頃、子息清頭夫妻にその経営一切を任せ、清頭夫妻はアラバマ州モービル市の近郊に移った。この頃からアメリカで排日運動が起こり、とうてい帰化権を得られないことに彼は失望し、一九一八年後事を清頭に託し、星名と同様、ブラジルに渡る。しかし、そこでの開拓事業は、当初より案外順調にいかず、十四年を経た一九三二年、病気のこともあり、日本に帰国する。だが故国に落ち着くひまもなく、朝鮮、満州の農業事情、移民の適否などを視察調査したが、期待するほどのものは得られず、一九三三年、今度は台湾に活動の場所を求め、屏東においてテキサス米の種粒で稲作をはじめた。さらに南方フィリピンでの大農式稲作を計画し、そのため

の南方米の優良品種育成に没頭した訳である。しかしながら、既に老齢のうえ、持病も回復せず、また国際情勢も悪化したため、その構想も断念し、四年後の一九三七年、日本に引き揚げた。そして墳墓の地と定めたテキサスに帰り、昭和十四年（一九三九年）、波瀾に富んだ七十七歳の生涯を閉じた。

父清東の遺業を継承して、清頭も農場を経営、父子二代、米作りのパイオニアとしてたえられ、一九五七年日本政府から勲五等を贈られたが、その後も、一九七三年なくなった。アメリカで一九六一年発行の教科書には、偉大な日本人として、細菌学者野口英世とならんで、「ライスキング西原清東」が掲載されているそうである。一九六三年には郷里の土佐市に彼の頌徳碑も建立された。最近、西原農場の一部は、アメリカ航空宇宙局（NASA）の人間宇宙飛行センターとなり、多くの施設が建設されて、昔の面影はないらしい。そのNASA街に、一九七四年、ヒューストンの商業会議所が西原農場の記念標を建てた。この時、農場開設後七十年を経過していたのである。

* * *

以上のように、これらの人物について簡単な伝記ふうに記述したにとどまった。しかし、筆者にとって、すでに明治期・テキサスにおいて、おそらくキリスト教徒というつながりで結ばれた彼らが、その後世界の各地で活躍するのを知ったとき、彼らが、今後の国際社会での我々の生き方を教示しているように思われ、きわめてこの作業は有意義であった。資料収集の際、こ

協力いただいた方々に感謝し、この拙ない報告を終わります。

（女子中・高教諭・社会）

* * *

【主要参考文献（年代順）】

- 外務省通商局『第二回移民調査報告』（一九一〇）
- 石川達三『最近南米往来記』（一九三二）
- 片山潜『自傳』（一九五四）
- 永井松三編『日米文化交流史』、移住編（一九五五）
- 『パウリスタ新聞』（一九五七・十一・二十三）
- 泉靖一編著『移民』（一九五七）
- 岸本英太郎他『片山潜』（一九五九）
- 隅谷三喜男『片山潜』（一九六〇）
- 加藤新一編『米国日系人百年史』（一九六一）
- 砂川萬里『西原清東翁傳』（同志社新報一九六二・十・一〜一九六四・七・十五）
- 猪野正義『巨人西原清東』（一九六四）
- 若槻泰雄『排日の歴史』（一九七四）
- 星新一『明治・父・アメリカ』（一九七五）
- 中村貢『デントン先生』（一九七五）

W.M. Vories と A.A. Hyde (2)

浜田清夫

これより数ヶ月前、吉田不在中の近江八幡で、当時の片田舎としては歴史的な出来事が起こった。それは万国YMCA主催のスマス・ロビンズ音楽伝道団の八幡訪問である。教派を超えた外国伝道に熱心なハイドは、この世界一周の音楽伝道団派遣の費用の大部分を負担し、近江八幡訪問を条件とした。フレッド・B・スマスの説教、音楽家ロビンズ、それにYMCA男声四部合唱を合わせた珍らしいこの音楽伝道団が八幡を訪れたのは、二月十四日のバレンタインの日であった。一行の訪問は小さな町にとつて、まさしくアメリカからきたバレンタインであり、伝道集会が未曾有の盛況に終わったことは言うまでもない。この音楽伝道団には一介の事務員としてアレックス・ハイド青年が加わっていた。息子に身をもって近江ミッションの活動を見学させ、かつ、力強い声援を送るため、わざわざ参加させたのである。ヴォーリスは案内役を引き受け、北は北海道から南は九州まで方々の都市を巡回する音楽伝道団に奉仕した。この間、アレックスは八幡に残り、同労者と交わりを深め、近江ミッションの事業についての報告をハイド老人に持ち帰った。ハイドの

ヴォーリスに対する友情と伝道事業に対する深い理解を示すエピソードである。

ヴォーリスは、スマス・ロビンズ伝道団の後を追うようにして四月に渡米、講演旅行で東部に向かう途中ウイチタに立ち寄り、ハイドと旧交を温めた。ハイドは自分の所属のプロレスビテリアン教会で近江ミッションの活動を紹介してくれるように頼んだ。このあと、ヴォーリスは各地の教会、YMCA、大学で講演し、前述のごくモホンク湖畔で吉田と落ち合う。そこで別れた吉田は、S・V・M・カンザス大会に出席、奇しくもハイドに援助を仰ぐことになった。

ハイドの招きを受けて、二人は再び合流し、ロッキー山中の高原、コロラド州のエステス・パークの別荘にハイドを訪れた。ハイドは既に息子アレックスから近江ミッションのユニークな活動と、その中心となっているヴォーリスの献身と徳望についてつぶさに報告を受けていたので、かねがね胸中に温めていた考えをもらす。すなわち、独立自給の伝道の資源として、また同時に日本の企業にキリスト教的職業倫理実践の範を垂れるために、メンソレータムの販売代理店をやらない

かとの親切な申し出である。これが後日近江ミッションの活動に新生面をひらくことになるのである。それだけではない。話がたまたまスミス・ロビンズ音楽伝道団訪日のことに移った。ヴォーリズは音楽伝道団を西日本に案内した時、十五年間瀬戸内海の島々を福音

丸という名の船でまわりながら、独創的な伝道が続いているピッケル船長と会い、教わるが多かったと話した。交通不便な琵琶湖の西岸、そのほか船でしか行けない農漁村が未開拓で、伝統的な伝道に有望であると懸命に話すのを聞き、ハイドは即座に伝道船を提供することを約した。それから数ヶ月、約束どおりハイドから送られてきた船は、相当な速力と積載力を持ち、湖上の嵐にも充分堪えられるドーリー型六人乗りモーター・ボートで、別にそれを動かす費用として三年間、年額三千ドルの寄付も添えられていた。これこそ琵琶湖伝道船「ガリラヤ丸」で、それから四半世紀の間、近江兄弟社開拓期における有力な一部門として伝道に役立ち、西江州に建物、伝道者を備えた半永久的伝道所が開設される基となった。大津を起点とする江若鉄道が開通し、また、第一次大戦で石油が不足

したため現役を退いたが、間もなく大阪市内の河川運送用にと、建造時の値段の二倍である商社会社に買い取られた。その代金は、ハイドの了解のもとに相当広い土地の購入に当てられたが、形を変えて近江ミッシヨンのために二度のつとめを果たしたわけである。

メンソレータムの日本での発売は、体制が整うまでに多少時間がかかり、大正九年（一九二〇）の近江セールズ株式会社の発足をもって本格的に始まる。それまでは吉田が個人的伝手を求めて奔走し、京都ではある救世軍の熱心な信者の協力を得て京都中の薬屋にメンソレータムを宣伝してもらったり、東京ではある薬剤師に東京での販路開拓を依頼するという有様であった。この薬剤師こそ東京靈南坂の教会員佐藤安太郎であり、吉田から聞いたハイドの信仰や人格に心を動かされ、メンソレータムの販売に特別の使命を感じて同労者に加わる決意を固め、家業を譲って近江八幡に馳せ参じ、従来の建築部門と一緒になつて近江ミッシヨンの基礎を固めた。メンソレータムの販売は門司のクリスチャンの薬屋を通して九州全土に、海峡を渡っては竹内という朝鮮通のクリスチャンを通して朝鮮中に、

更に満州は石田という大連のクリスチャン実業家を通して、販路は遠く北支全体に及んだ。^①

ハイドとヴォーリズの友情は、夫人同士の友情へと広がった。近江ミッシヨンの一事業として教育機関を加える必要を痛感した満喜子は、手初めとして清友園幼稚園を大正九年に開いた。これが近江兄弟社学園の濫觴である。アメリカの教育理念を教育現場から学ぶため昭和五年に渡米した満喜子は、ハイド夫人に会った。帰国した満喜子宛に三万ドルが校舎新築資金として送られてきた。すでにその頃、耳も遠くなり物も言えなくなっていたのに、老夫人は学園の趣意に賛成し、自分の貯金全額と息子たちの寄付を合わせて贈ったのである。^②

近江ミッシヨンの目ざす目標は、次のごとく明確に規定されている。

Industry without industrialism,
(産業主義に墮することなき産業)

Professional service without
professionalism,

(プロ氣質に墮することなき)
プロのサーヴィス



A. A. Hyde

Trade that is based on equal exchange rather than profit.

(利潤よりも平等な交換に基づく取引)

Education that is not propaganda but pedagogy,

(宣伝するのではなく、^{まな}教める教育)

Evangelization of the head and hand no less than of heart,

(心の福音に劣らず、頭と手の福音を)

Brotherhood in all the relations of life.^③

(^{実生活}のあらゆる交渉において兄弟愛を)

その求めるところは、新しい社会建設である。神の国は神のみが建設できるとしても、キリスト者はみなヨハネに倣い、その地上で

の実現のために、せめてもの礎を築かねばならぬ。伝道を志すものは、単にスピリチュアル・アドバイザーとして百の説法を垂れるよりは、率先垂範すべきである。僧院主義的静思(monastic retreat)は自己満足にすぎない、この主張である。

「理想は結構だが実現できるものではない」と冷やかな陰口を耳にしながらも、初期の建築部門は禁酒禁煙、七〜八時間労働、土曜日半日で超過時間労働禁止、聖日厳守の規則を自らも守り、また相手方の契約主およびその従業員にも要求した。

ハイドとヴォーリスを結びつけたものは、十九C末の約三十年に回帰したりバイバリズムの精神であった。成功は有徳の現われ、財産は労働と節約をもって召命を全うした者とのみ与えられる恩寵の外的表示と見た「富の福音」論者と、産業社会の諸悪は社会が原罪を背負っているためであり、すべからずキリスト者はすべて社会改革家たれと主張する「社会的福音」論者の中間にあって、「自分の宝は天にたくわえる」ことを願い、神の執事として自分に預けられた地上の宝を福音伝道に還元することを選んだ。しかも「万灯の長

者」になるよりは、「一灯を献する」真心をもって天職に奉じ、また進んで心の貧しき人たちに魂の救済の手をさしのべた。彼らは共に教会の形式主義、退嬰性、偏狭性に不満を覚え、教派を越えた平信徒の自給自立の伝道、YMCA的、道徳再武装的精神運動に挺身した。彼らの伝道の対象は、学生、商人、職業人、農夫、それに労働者とは言っても、鉄道従業員など、言うならば中産階級であり、理屈っぽい「社会的福音」論者でも、極貧層に働きかける救世軍でもなかった。彼らは十九C最高のエバンジェリストと呼ばれたムーディ(Dwight Lyman Moody)の延長線上に^④いる。

おわりに

ハイドは昭和十年(一九三五)に昇天し、メソソレータム社は彼の遺志と共に息子に受け継がれた。それ以来四十年、またヴォーリスの昇天以来十年、それぞれ創始者の意を体した後継者の努力は続けられたが、両社の関係は風化し、一昨年末の近江兄弟社の倒産はこれにピリオドを打つことになった。昨年二月、現社長ジョージ・H・ハイドからメンソ

レータム製造販売許可契約破棄通告があった時、近江兄弟社に見切りを
つけたというよりは、会社再建が社内内紛で捗らないため外圧をかけ
てきたのだとの楽観論もあったようであるが、四月下旬に新提携先のロ
ート製菓が独占権を取得したと発表があり、これで近江兄弟社との絶縁
が決定的となった。

理想が高ければ高いほど、挫折の幻滅は大きい。倒産が明らかにした
ものは何か。ヴォーリスとハイドが求めた「神の国」が、それぞれの後
継者には望み見ることさえ叶わぬ遠くへ離れたということであろうか。
ヴォーリスの後継者がハイドの後継者よりも「神の国」により、近いと
いうのであろうか、それとも逆であろうか。ヴォーリスやハイドの後継
者たちの努力とは無関係に、彼らや我々が乗っているこの惑星自体が遠
心的な軌道にのって、ますます神の星から遠ざかって行くように思われ
て仕方がない。

(大学文学部教授・アメリカ研究)

(注)

- ① 『湖畔の声』第六八八号(昭四十七・十一)九頁
清水安三『吉田悦蔵と近江兄弟社』
- ② 一柳満喜子『教育のこころみ』近江兄弟社学園
(昭四十七)三十四頁・一六八頁
A. Mustard Seed in Japan, p.63
- ③ 別稿「W.M.Vories と第4回 S.V.M. トロント
大会」(同志社アメリカ研究第十二号、一九七六)
参照。

なお、下記の資料を随所で使用した。

- 一柳米来留『失敗者の自叙伝』近江兄弟社(昭四十五)
吉田悦蔵『近江の兄弟』近江兄弟社(六十二)



同志社大学名誉学位受領者略歴

John Whitney HALL 氏
(名誉文化博士)

- 1916年9月23日生
1935 Phillips Academy, Andover 卒
1939 Amherst College 卒
1939-41 アーモスト大学代表、同志社大
学予科教授
1950 Ph. D., Harvard University
1955-61 Director, Center for Japanese
Studies
1959 Professor, University of Mich-
igan
1961- Professor of History, Yale
University
1967-68 President, Association for
Asian Studies
1968 Chairman, U.S. Delegation,
U.S.-Japan Cult. & Education
Conf., Washington D.C.

- 1971- Chairman, U.S.-Japan Culture
and Education Interchange
Committee
1971-74 Chairman, Department of East
Asian Languages and Litera-
ture, Yale University
1974-76 Chairman, Department of
History, Yale University
1976- Chairman, U.S.-Japan Friend-
ship Commission
著 書 『Tanuma Okitsugu, Fore-
runner of Modern Japan』
(Harvard University Press,
1955)
『室町時代の社会と文化』
(豊田武共著, 吉川弘文館,
1976)
その他
現住所 110 Rodgers Rd., Hamden,
C. T. 06517